

Support for the Mothers Who Experienced Childhood Abuse and Have Subjective Difficulty on their Childcare : Focusing on the Effect of Reminding their Childhood Memory to the Quality of Child Care

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上原, 由紀 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/438

被虐待経験を持つ母の育児困難感に対する援助について —虐待記憶の想起が育児に及ぼす影響との関連を中心に—

Support for the Mothers Who Experienced Childhood Abuse and
Have Subjective Difficulty on their Childcare
—Focusing on the Effect of Reminding their Childhood Memory to
the Quality of Child Care—

上 原 由 紀
KAMBARA, Yuki

．はじめに

日本においては現在、被虐待児への初期対応におけるシステムが確立し、家族再統合を目的とした虐待加害者である親への支援についても研究が進んでいる段階であると言える。加害者への支援としては、心理教育や心理療法などを用いたプログラムが、各都道府県の児童相談所において、活用され始めたところである。しかし、過去の虐待記憶がより想起されるであろう子育て場面において、成長した虐待被害者が抱える困難感については、ほとんど研究がなされていないのが現状である。児童虐待の防止等に関する法律が成立しておらず、受けている暴力を虐待と認められずに育った子どもたちが今、子育てをする世代となっている。守られることなく被虐待を生き抜いたサバイバーが、子どもを大事にしたい、自身と同じ思いをさせたくないと努めながら、子育て場面においても一人で向き合っている姿が少なくないと思像できる。現在の虐待への取り組みに、「子どもの時には暴力も躰の内だと社会から見捨てられ、今は加害者として責められている」と感じている虐待サバイバーもいるかもしれない。虐待サバイバーの語りに耳を傾け、理解を深めることが、今、専門家に求められているのではないだろうか。児童虐待への対応の1つとして、被虐待経験者への支援の充実が今後の課題であると言える。

尚、本論文では、ハーマン（1996）、斉藤（1999）、エバンズら（2007）等の「サバイバー」の使用意図を支持し、自身に、被虐待環境を生き延びる力があり、加えて回復に努める力を持っていると知るための言葉として、また、それを援助者が支持する言葉として、「虐待サバイバー」という言葉を使用する。

．方法・対象

（1）目的

出産や育児が、虐待記憶を想起する誘引となるケースは少なくない。虐待サバイバーの

岡田（2004）は、手記において「私が過去に封印したにも関わらず、息子の成長と言うきっかけによって、どんどん記憶が蘇り、私を過去の地獄の世界に引き戻そうとすることで」と語っている。そう述べた後、「今の私なら幼い自分を守れるのに、なぜ私の幼少期には、現在の私のような大人が身近にいて、私を守ってくれなかったのだろうか」「息子に対しては、こんなに息子を愛している母親がいる事に対して、とても羨ましく思ってしまう」という二つの葛藤に苦しみ、それでいて「根本の私を苦しめている原因もわからないまま、長い間私は、息子の成長と共に苦しまなければならなくなった」と回想している。また、春原らの研究（2004）では、虐待に悩む親が「自分が幼少期からされてきたことを何の抵抗もなく反省しつつも繰り返していた」と語っている。子どもを育てる際、育てられ方の影響は大きい。しかし、虐待サバイバーは、自身の育てられ方を感情を伴って想起しながらも、それとは異なる育て方をしなければならない。その育児は、実感の伴わない、体験していない育児である。そうした虐待サバイバーには、一般的な母親に対する子育て支援では、不十分である部分が生じてくると考えられる。

虐待サバイバーが持つ特有の困難感に対し、適切な理解と援助が得られれば、その困難感を乗り越えられると私は考えている。そこで、虐待加害者としてではなく、被害者として虐待サバイバーを捉え、育児場面における特有の困難感を明らかにすることで、それらを軽減し、虐待予防に繋げるために必要な子育て支援を考察することが、本研究の目的である。

（2）予備調査

本調査を実施する前に、書籍やインターネットにおいて、被虐待体験を持つことを表明しており、子育て場面について記述している10名（インターネット3名、書籍7名）を調査対象者とし、子育て場面の困難感を中心に語られた文章を分析対象として予備調査を行った。得られたデータを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ法を使用して分析し、20概念が生成された。それらの結果から、本調査において適した質問内容の検討がなされた。インタビューの中では、生成された概念を参考にし、必要に応じて自然な形で質問をすることで、協力者の語りの具体化を促した。また、本調査の分析に際しても、予備調査の結果を参考にした。

（3）調査対象者

調査協力依頼は、虐待を受けたと自認しており、子育ての体験を持つ3名に行い、全員から同意が得られた。電話により依頼内容の説明をし、依頼状送付の了承を得られた後、「調査協力依頼書」を郵送した。依頼状には、研究目的や調査内容などの他に、調査者が捉えている「虐待サバイバー」についての説明も加えた。その後、再度電話で協力の意思を確認した。調査前には、書類を用いて再度説明し、語る内容は選択して構わないこと、調査途中で中断することも可能であることを伝えた。その上で、協力者が内諾した場合には「研究目的の説明および同意書」に署名を受けた。同時に調査者は、調査内容を研究以外に使用しないこと、プライバシーを守ることを確約し、「研究目的の説明および誓約書」に署名した。加えて、上記の誓約内容を条件に、インタビュー中の録音や記述による記録についての同意を得た。また、調査終了後、調査内容に関連して語ることが必要になった

際には、調査者が面接をする旨を説明し、実習機関である武蔵野大学心理臨床センター子ども相談部門の了解を得て連絡先を伝えた。

協力者の年齢は、それぞれ24歳、43歳、48歳であり、性別は全員女性である。現住所は3名とも関東であるが、出身は各地にまたがっている。すべての調査者が、父親か母親、または両親から、身体的虐待、心理的虐待、ネグレクトを重複的に受けており、2名または3名の子育て経験を持っていた。

（４）調査方法

インタビュー調査は、3回に分けて実施し、所用時間は1回につき平均1時間35分であった。調査期間は、2007年8月下旬から9月下旬の約1ヶ月間であった。インタビュー内容は、協力者の許可を得て、録音と記述にて記録した。

質問は、研究の目的が「被虐待体験を持つ方の子育て場面における困難感への理解とその支援」であることを伝えた上で、次のようになされた。ただし、できる限り協力者の語りに自然な流れで聞いたため、多少の前後は許容している。1回目の調査では、育てられ方の体験、虐待サバイバーの受容過程、子育て場面における困難感を中心に尋ねた。2回目の調査では、引き続き子育て場面における困難感を中心に、支援についても尋ねた。3回目の調査では、有効であったリソースや支援、望む支援を中心に尋ねた。被虐待体験の後にはサバイバー受容過程を、育児場面での困難感の後には役立った支援を尋ね、乗り越えてきたことを確認できる形で毎回終了できるよう配慮した。3回すべてのインタビュー内容を分析の対象とした。

（５）分析方法

本調査では、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを基本としながら、協力者の独自性を尊重するため、それぞれに対して分析を行った。

それぞれのインタビュー内容を、すべて文字データに変換した。その上で、被虐待体験から出産までを中心としたライフヒストリーを構成した。その際、できる限り協力者の意味付けを排除した。さらに、虐待サバイバー受容の過程を構成した。親の育て方が不適切ではないかと疑問を持った時点から、それが虐待だと認識し、虐待を受けて育った自己を受容する過程までを時系列に構成した。協力者が虐待サバイバーであることは、以上の内容から証明された。

文字データより、子育て場面における困難感について語られている部分を抽出した。抽出されたヴァリエーションから、それぞれの協力者ごとに分析ワークシートを作成し、同じような内容を示しているものをまとめ、それを表す概念名を付けた。その際、ディテールの豊富な語りの特徴を重視し、データの切片化を避け、エピソードのまとまりで捉えられるようにした。また、分析ワークシートを作成する際には、抽出されたヴァリエーションから、いつでも本データに戻れるよう工夫した。その作業は、繰り返し行われた。

子育て場面におけるリソースについては、同じように抽出した後、種類によって分類した。協力者ごとに分類したため、その種類はそれぞれ異なっている。また、自然な流れで得られたデータであるため、語られなかったものについては扱っていない。

・結果・考察

インタビュー内容から、ライフヒストリー、虐待サバイバー受容過程、子育て場面における困難感、子育て場面におけるリソースについてまとめ、(1)虐待サバイバー受容、(2)子育て場面における困難感、(3)育児支援に分けて考察した。それぞれの対象者における独自性を尊重しながら、共通性を含めて考察している。

(1) 虐待サバイバー受容過程

サバイバー受容とは、親の行為が虐待であると認識することから始まり、最後は虐待を受けて育った自己を受容するまでの過程を指している。

虐待と認識する

親の行為が虐待だと認識することは、それが「当たり前」の生活をしてきた被虐待児にとって、実はそう簡単ではない。絵本やテレビ番組によって“母親イメージ”が持てた時、それとは異なる自身の親に疑問を持つことはできるかもしれない。しかし、具体的にどう異なるのかを知るには、違いに気付く機会に出会うことが必要となる。A、Bが育ちへの疑問を明確に持ったのは、親以外の親しい関係が築かれた時であった。高校の友人が自由に買物できる姿に、自身ができないことへの疑問を持った。また、夫が親に了解を得ずに物事を決断することに、怒られないのかと疑問を持った。そうした時、自身の家庭では「当たり前」であったことが、常識ではないかもしれないという疑問を持つことが可能となる。そうして他の価値観に触れることが、虐待と気付く第一歩となっている。また、親からの養護が必要な時にそのことに気付けば、加害者である親との生活は苦しみを伴うであろう。3人に共通していることは、ある程度自身で生活できる年齢になってから気付いているということである。もちろん、気付くことのできる発達的な意味合いもあると思われるが、親から離れられることも無関係ではないと考えられる。

Cは、書籍によって気付きの機会を得た。Aも幼い頃、本を読んで得た知識によって、自身は虐待を受けているのではないかと感じていた。Cはその後、多くの書籍を読み、そのことで自己内省を深めていった。これまでも述べてきたように、書籍やインターネット等による情報は重要であり、心理教育の一端を担っていると言える。しかし一方で、Aは書籍を読むことで、見透かされているように自身の状態が列挙してあるばかりで、回復や支援についての記述がなく、興味本位で実験されたかのような感情にもなったと述べている。そして、そうした客観的な知識のみで自身の苦しみを判断されることに、不安も感じていた。近年では、そうした文献はあまり見られないが、研究者は、真実を明らかにすると同時に、その文献によって被害者支援をしているという視点を忘れてはならないのであろう。

親の支配から逃れる

虐待と気付いてから、Aは外向的に、Cは内向的に親の支配から逃れる努力をしている。Aは、家を出して働き出し、1年後には出生地からも遠く離れることで、物理的に親から離れている。また、キャバクラという親の期待から大きく外れた職種を選択したことも、親の支配から逃れようとした結果かもしれない。高額収入を得て浪費したことで、過去の貧困な生活と決別したことも語られている。一方Cは、引きこもるという方法を取って

いる。偶然にも、加害者である父親が単身赴任していたことは、Cにとって幸運であっただろう。部屋に閉じこもり、本を読み、過去を捉え直すことで親の支配から逃れようと試みている。その中で、自身が生きるためには親を殺すしかないと考えたことは、非常に興味深い。多くの事例からも分かるように、虐待環境は逃げるという選択肢を被害者から奪う。そのことで、殺すか死ぬかしかないと思わせるのである。また、親である支配者から逃れるには、それほどまでのエネルギーが必要であるとも言える。実際に殺すことはなかったが、この時Cは、殺したいほどの親への憎しみを自覚したのではないだろうか。そして、精神的には内なる親を殺し、親の支配から逃れられたのかもしれない。

Bは、結婚によって親から離れたところで、虐待被害を受け入れる過程を踏んでいる。彼女にとって、最初のリソースとなったのは義母だった。彼女に対して絶対受容を貫いた義母は、彼女にとって母親代わりとなったのかもしれない。また、義母と同居したことで、適切な育児に触れる機会にもなっている。ただし、嫁と姑という関係性や虐待による影響などから、信頼関係を築くことは難しかったと思われる。義母や夫の支えで安定した家庭を築いたことで、Bは母親の支配から逃れられたのだと思われる。

彼女らが親の支配から逃れようとする時、虐待者はそれを阻止しようと試みることを示された。Aは家出をした際、執拗に追い求める母に、娘が手の届かないところに行くことへの母自身の怖さがあったのではないかと述べている。Bは結婚前に母から嫌がらせを受け、奴隷のように仕えていた娘がいなくなるとおぞましいと感じていたのではないかと述べている。Cも結婚により逃れられたと感じた際、親からつらく当たられている。虐待サバイバーが親の支配から逃れるためには、こうした試みと闘わなくてはならず、多大なエネルギーを要する。その際、夫や友人、専門家などのリソースが、サバイバーを支える大きな力になると言える。

自己を知る

虐待者の支配から逃れると、親に影響されない自身の考えで、自己や過去と向き合う作業が必要となる。つまり、それまで自身の中心にあった虐待者の価値観を否定することで、アイデンティティを確立し直す必要が出てくるのである。特に、虐待による影響や自身の「癖」に気付くことで、生きづらさを軽減する姿が見受けられた。

Aは、キャバクラで働く過程で、自身で判断できないことや仕事仲間との距離感がつかめない自身に気付いている。仲間との関係がうまくいかず、すぐに気を許してしまったり、相手の気持ちを汲み取れなかったりしていた。Bは、グループカウンセリングを受けたことで、自身に起きていることの「メカニズム」を知り、自己内省を繰り返すことで気付きが進んだ。例えば、気になるところしか見てはいけないうように感じて、広く見ようとしないう癖があるといったことを述べていた。Cは、過去の記憶を捉え直す作業の中で、自身がどう感じていたかを思考している。そして、自身がそれまで能力的には優秀であってうまくいかなかったのは、精神的に自立しておらず、自身で判断できなかったためだと気付いた。

自己を受容する

虐待を受けていたことを認識し、自身がその影響を受けていると気付いた上で、そうした自己を受け入れることが次の段階となる。この作業には、他者が大きな役割を果たす。他者に認められ、受け入れられることで、サバイバーは自身を受け入れていくと言える。

Aは、仕事で認められたことと、夫に甘えられたこと、そしてインターネットを通じて出会った友人たちの存在が大きかった。Bは、夫や義母の支えと、グループカウンセリングでの受容、そして近所の友人たちから認められたことが大きかった。そしてCは、保健師の支援と母親サークルを主催して認められたことが大きかった。

親から否定され続けた虐待サバイバーにとって、自己を肯定することは非常に困難である。Bは、生きていてはいけないという認知をなかなか変えることができず、自殺未遂を繰り返した。加えて、虐待による影響を知ること、人とは違うという思いを持ち、孤立感を高めることもある。Aのように、実家を頼る友人たちに触れることで、実家に頼れない自身の状況に孤独感を持つ場合もある。Cも、他者と何気ないおしゃべりができず、常に寂しさを抱えていると話していた。そうしたサバイバーが「生きていていい」と思えること、「自分はこのままでいい」と思えることは、非常に重要な過程となる。そして、この過程は一度経れば済むものではない。幾度となく内在化した親の価値観が襲ってくる。そのたびに、自己受容を支える周囲の人々との関係が、サバイバーには必要であると強く感じた。

育児のスキルを学ぶ

あまり述べられていないが、自己受容過程を踏んだ後に必要なことがもう1つある。それが、子育て場面におけるスキルを学ぶことである。これは、順番を誤ってはいけない。自己受容に至らないまま、育児スキルばかりを支援することは、自己否定感を高まらせることになり兼ねない。また、Bが盛んに述べていたように、基本的な「メカニズム」が理解できなければ、スキルを学んでも一時的な解決に過ぎず、失敗を繰り返す可能性がある。そして、繰り返すことで更に、サバイバーの自己否定感を高めることとなる。

虐待を受容する過程を支えた臨床家が、育児のスキルまで見守れる支援が、より良いだろうと筆者は考えている。子ども時代の問題と親としての問題を、同じ場で取り扱うことは難しいかもしれない。まして、サバイバーが子どもに虐待を行っているとしたら、子どもの援助を行っている支援機関の臨床家は、子どもの立場に立つがゆえに虐待者の受容が難しくなるであろう。しかし、Aが述べるように、自身の過去を知り、自身が陥りやすい癖を理解している支援者にこそ、本音で子育てについての相談ができるのだと思われる。

今回の調査で、子育て中にも虐待サバイバーの困難さが存在していることが明らかとなった。その支援のためにも、過去を知る臨床家が育児までサポートする体制が重要であると考えられる。そして、被虐待環境であったために失われている育児スキルを身に付け、子育て場面における困難感を解消する方法を得るまでが、虐待サバイバーの受容過程と考える。

(2) 虐待サバイバーの子育て場面における困難感

ここでは、調査から得られた虐待サバイバーの子育て場面における困難感を考察する。

記憶が甦る

初めての育児と、その成長に伴う過程で、自身の被虐待体験が想起されることが具体的なエピソードによって示された。子どもに自身の体験が重なることとも似てはいるが、再体験を伴うものとして類別した。成人し、結婚などで実家から出て、ようやく被虐待環境から離れた生活が続けられた頃、第一子の誕生が、久しく思い出すことのなかった被虐待

記憶を想起する刺激となっていることがうかがえた。その時サバイバーは、困惑、怒り、悲しみ、恐怖、不安などといった様々な感情が沸く。しかもそれは、思い出すという類ではなく、今ここで感じている生々しい感情である。そのため、泣き出したり、怒り出したり、震え出したりすることも語られた。

そうしたことが起きれば、自身の感情の処理に追われ、子どもをケアすることは非常に難しい。例えばその時、子どもが泣き出したとすれば、怒りを子どもに向け、感情的に怒鳴ったり叩いたりしてしまうかもしれない。しかしそれは、表面的には加害者であっても、内面的には被害者である部分を抱えていることを、援助者は理解しなければならない。さらには、サバイバーはそうして怒りを子どもに向けてしまったことを、母親と同じことをした、連鎖してしまったと感じて心を痛めている場合が多いのである。

記憶が甦った時、Aは、自身を甘やかすという方法を見出していた。無理をして頑張ろうとすると、さらに悪化することを経験から知り、家事などは最低限に抑え、子どもたちもできる限り自由にさせ、子どもと食べたい物を食べに行くなど、自身の欲求を満たすことで回復が早くなると述べていた。このことは、満たされなかった過去の記憶が甦った時、今ここでの自身を満たすことで乗り越えられることを示している。また、Bからは、その甦った過去を語ること、書くことの効果が述べられた。記憶が甦った際、夫や義母から手伝いを提案されても受け入れることができなかった。通院した時も過去の話を読むことはできず、「根本」の解決には至らなかったと感じていた。つまり、自身を甘やかすなど、環境を整えるだけでなく、被虐待体験を語ったり書きまとめたりするなど、甦った記憶自体を扱う作業も必要だと言える。

経験がなく、分からない

不適切な育児を受けてきた虐待サバイバーが、適切な育児をしたいと努力しながら、その適切な育児が分からないと感じていることが示された。特に、共通して話されたのは、「どこまで」という具体的な加減が分からないことへの困難感であった。どこまで叱っていいのか、どこまで甘やかしていいのか、どこまで手を抜いていいのかなどといったことが分からないと感じていた。自身が知っている叱り方をすれば虐待になると感じており、その逆をしようと考えても、具体的にどうすれば親の逆になるのかが分からず、叱らないで育てることもできないために、不安を高めるといったことがうかがえた。子どもの接し方を周りの母親から学んだという経験も多く語られたが、叱ることに関しては、公の場では叱る姿を見ることが少ないために、自身が叱り過ぎなのではないかとより不安を高めていた。かつてのコミュニティのように、大人が他所の子どもを叱る場面に触れる機会は、現代では非常に少なくなったと言える。また、虐待だと思われることへの不安から、自身の子どもを適切に叱る母親の姿も減少したと言えるだろう。そういった中、自身の親から学ぶことのできなかったサバイバーが、育児に戸惑うのは当然とも考えられる。

虐待サバイバーが分からないのは、加減ばかりではない。幼い頃から多くを求められ、日常的に応えてきたサバイバーは、自身の子どもに対しても多くを求めてしまう場合がある。つまり、子どもの発達段階に合わせた躰が分からないと感じているのである。Cが、2歳の子どもに扇風機のスイッチを入れさせようと、左右を教えようとして分からないことに苛立ったり、Bが、幼稚園で弁当の蓋を閉められない子どもにどうして良いか分からず、電話相談をしたりといったことがそれに当たる。Bは、電話相談で「そのまま蓋を乗

せて袋に入れればいい」と言われ、それでもいいのかと気付いたと話していた。そうした細かな対応を伝えられるような支援こそ、サバイバーには必要なのである。また、Bは「子どもってこういうもの」ということを専門家に言われると安心に繋がるとも話しており、援助者が子どもの発達に熟知していることの重要性も再確認された。

育児に関する書籍は多く発行されており、そうした知識を得ることも確かに重要ではあるが、実感を持たないサバイバーには、行動しながら気付くことが有効であると筆者は考えている。コモンセンス・ペアレンティング・プログラム（CSP）や親子相互交流療法（PCIT）のように、援助者に安全を見守られながらロールプレイや実際に交流することは、こうした保護者にとって有効であると言える。また、Aが述べていた「大丈夫よって言われても、いや、実はね（被虐待体験がある）って感じ」「ストップを掛けてほしいの」という言葉からは、これまで多くの研究で言われてきた受容や共感だけでは不十分であり、育児教育・指導といった支援の充実が求められていると考えられる。

Bは、こうした分からなさを「どういう風に伝えたらいいのかが分かんない」と言いながら「みんなが普通に分かってることさえ、理解できないこと」だと述べている。この言葉からは、サバイバーの分からなさが伝えにくく、理解されにくいものであると感じられていることが現れている。Aは周囲の人々に対し、「（サバイバーの）分からないことが分からないんじゃない？」と述べている。そして、共通して語られたのは、虐待を受けて来なかった人のことが理解できないと共に、虐待を受けてきた自身のことを理解されないことであった。つまり、サバイバーの困難感は、分からなさだけではなく、その分からなさが理解されないことにもあるのである。専門家は、その分からなさを知ることで彼女たちの孤立感を軽減し、必要な援助を見出す役割を担っている。そのためには、サバイバーの分からなさを、具体的に想像できる知識や経験が必要であると言える。

子どもと子どもの頃の自身が重なる

ここでは、2つの場面が語られた。1つは、子どもを大切にしている時に、逆説的ではあるが、親に大事にされなかった自身が重なることである。Aの言う「愛されている子と、愛されなかった自分」という言葉に表れている。この感情は、次に述べる「子どもを羨む」ことへも繋がると思われる。もう1つの場面は、子どもを叱っている時に、親から虐待を受けていた自身が重なることである。これらは、Bの言うように「親の気持ちと子どもの気持ちを両方兼ね備えちゃってる」ことであり、親として養育しながら、同時に子どもとしての感情が沸くという状況を示している。しかもその感情は、悲しみや恐怖といった否定的な感情である。しかし、その子どもとしての感情をケアする親はおらず、自身は親として養育する役割にある。サバイバーは、そうした感情を抱えながら育児をしなければならず、その感情によって十分な育児が行えないこともあり得るだろうと思われる。

また、自身に似ている子どもや自身と同じようなことをする子どもに触れ、子どもに自身を重ねて育児に不安を感じる事が共通して語られた。つまり、子どもと自身が同じだと感じることで、自身が虐待をしているのではないかと不安になるのである。逆に、子どもの頃の自身とは異なる行動を子どもが取れば、「私OK、この子もOK」と思えるとCは語っている。自身と同じように行動していると感じる子どもに対して否定的に捉えることは、Aが「自分がまたできちゃうんじゃないか（と不安になる）」と述べているように、自身を否定的に捉えていることと繋がっている。そうして自身に似てくる子どもを否定的に

捉えながら自己を受容していくことは、非常に難しいだろう。そうした困難さが、子どもへの不適切な関わりに繋がることも示された。

子どもを羨む

先述したように、大事にされている子どもと虐待を受けていた自身とを比べることから、子どもを羨む感情が生じることが明らかになった。子どもを大事に育てたい、自身と同じ思いはさせたくないと思いながら育児をする一方、その思いを実行すれば子どもを羨む感情が沸き、理不尽な思いや不満を抱えることになる。このことから、理想と現実の食い違いに苦しむことになる。また、Cが「親として」という言葉を多用していたように、一般社会から期待されている親役割を感じ取り、自身とのずれから葛藤が生じることもある。

この羨むという感情は、本来、加害者である親に向けられる怒りや悲しみ、寂しさなどといった否定的な感情が、形を変えて子どもに向かっている結果であると思われる。そして、子どもに向かうことでさらに、サバイバーが自身を責めることにもつながっていく。それら避けるためには、サバイバーの抱えている感情が「羨ましさ」であることや、それが被虐待体験から生じていることに本人が気付く必要がある。加えて、その感情を持つことは、否定されることではなく、起こり得ることだということを丁寧に伝えられることで理解する必要もある。さらには、その感情は加害者である親との関係で生じているものであり、自身と子どもとの関係とは分けて考えられるよう支援することにより、そうした困難感から回避できるだろうと思われる。言うまでもないが、何よりもまず、サバイバーの羨む感情を受け入れることが、援助者には求められている。

親と同じことをしたくない

共通して強く語られていたのは、親と同じことをしたくないという思いや決意であった。調査結果から、サバイバーの育児として特徴的だと思われたのは、「適切な育児を知らない」が、「親と同じことをしない」、「私は絶対に繰り返さない」、「子どもを悲しませない」、「同じ思いはさせない」などの思いから、完璧な母親像を思い描き、無理な育児となることで「思っていた育児ができない」ことに悩むというプロセスであった。この否定の羅列から成るプロセスは、サバイバーの適切とされる選択肢を狭めることとなり、育児への困難感を高めていくと考えられる。親としてのあり方が限定されていき、「理想の母親像」から外れれば不適切だと感じ、しかしながら、適切な育てられ方を体験していないために具体的に何をすべきかが分からない。また「同じことをしたくない」という思いが強いほど、自身の持つ理想に縛られ、苦しむ姿がうかがえた。

「（世代間）連鎖」という言葉は、調査協力者らも使用していた。その言葉は、彼女たちの連鎖するのではないかという不安を高め、「繰り返してはいけない」という思いを強めていた。Bは、過去の被虐待体験を「克服するためにも」育児をしたいという思いを持っており、過去の育てられる体験と、現在の育てる体験とを重ねていることがうかがえた。「世代間連鎖」という言葉は、一般的な人々に誤解を与えるだけでなく、虐待サバイバーに誤解と困難感を与えるという意味で、非常に危険であると筆者は考えている。たとえば、虐待サバイバーが育児場面で問題や困難を抱えたとしても、それは加害者である親とは別の問題として捉えなければ、本質は見えてこない。単に連鎖として見るのではなく、こういったことに困難を抱えているのかを詳細に知ろうとすることがなければ、虐待サバイバーへの援助は機能しない。そうして関わることで、虐待サバイバー自身も「繰り返し

てはいけない」という狭まれた選択肢から、自身の問題自体に意識を向けることができ、自身に起きているメカニズムへの気づきを促されることで、解決する力を得られるのだと思われる。

親と同じことをしたとを感じる

上記のように、「連鎖」という言葉は虐待サバイバーに困難感を与えている。ここで主張したいのは、世代間連鎖したことが困難感となるのではなく、世代間連鎖したと「感じる」ことが困難感となるということである。サバイバーが親と同じことをしたと感じた時、様々な感情が生じることが語られた。子どもにとっての加害者となること、子どもに嫌われるのではないかと不安になること、子どもに自身が重なること、過去の被害を再体験すること、そして、決して同じことをしたくないと思っていた親と同じになってしまったと感じることなどである。つまり、子どもを傷付けたことによる加害者性と、親から傷付けられたことによる被害者性とを同時に持つことにより、大きな傷付きへと繋がると考えられる。

もちろん、子どもへの加害に対する責任はあり、その解決に向けて努める必要がある。しかし、加害者としてのみ捉えることは、対処法とはなり得ても、長期的な解決には至らないことを彼女たちは伝えている。自身の行為に対する責任を負うためにも、被虐待体験からくる被害者性と現在の育児における問題とを整理した上で、被害者性をケアされると共に、問題の解決に努めることが必要なのである。そして、援助者が加虐待に悩む保護者としてサバイバーと出会った場合には、サバイバーの持つ困難感を理解し、保護者自身がその構造を理解できるよう気づきを促すことが重要になると考えられる。繰り返しになるが、サバイバーの困難感になるのは連鎖ではなく、連鎖したと「感じる」ことだということをおさえておかなければならない。

以上のように、虐待サバイバーからは様々な困難感が語られた。こうした困難感を、専門家だけでなく広く一般の人々に理解されることが、サバイバーには必要なのではないかと考えている。調査協力者たちは、被虐待体験を語ることで「連鎖するのではないか」「問題を抱えているのではないか」と偏見を持たれることを恐れていた。周囲が彼女たちをより理解することで、困難感は十分に軽減され、彼女たち自身が回復するためのレジリエンスを支えることができると考える。

(3) 虐待サバイバーへの育児支援

インタビュー調査では、困難感を抱えた際に、どういったことが支えとなったか、どういった支援が望まれるかを聞いている。また、語られた内容から、調査者がリソースと捉えた部分も抽出している。それらの結果から、どういった支援が考えられるか考察する。

専門家

調査協力者の全員が精神科や神経科に通院した経験を持っており、そこでの体験が専門家への信頼感を持つ上で非常に重要となることが示唆された。つまり、良い体験と感じられれば、他の専門家への支援を求めることにも繋がり、逆の場合には、援助を受けることを否定的に捉えることとなる。また、そこで初めて被虐待体験を語る可能性も高い。診察としては、詳しく被虐待体験について聞くことは難しいかもしれないが、最初の専門家として出会っているかもしれないということを認識し、診断と投薬のみならず、必要な支援

や支援機関を紹介するなど配慮が必要だと思われる。

育児への援助としては、児童相談所や保健所、子ども家庭支援センターなどの公的機関が繋がりがやすい。しかしその場合、育児に悩む親の立場として繋がることが多い。そこで被虐待体験が語られた時、被害者としてサバイバーを捉えられることが重要である。Cは、被虐待の影響で外出が困難になることが何度かあり、恐怖から保健師に助けを求めた時、すぐに来て話を聞いてもらえたことを非常に感謝していた。虐待サバイバーの困難感、親としての問題に留まらないが、親としての問題に繋がるものでもある。これまで述べてきたように、被虐待体験による問題をケアすることが、結果的には育児支援になることを念頭に置き、幅広い支援を充実させることが必要である。公的機関に対して、調査協力者からは期待と不信感がうかがえた。望む支援としては、子どもを遊ばせながら気軽に相談できる場の充実が語られた。子どもたちから物理的にも心理的にも距離を置くことで、育児に関する相談がしやすくなるため、親が安心して子どもを手放せる場所、子どもたちが安心して親から離れられる場所が必要であり、時には親子を自然に離す介入が求められる。しかし、その一方で、人が変わると助言が異なることや、専門外の部署から異動された職員がいること、話しても理解されないと思うことなど、専門性への疑問や不安が述べられた。親からの暴力を生き延びたサバイバーは、人に頼る経験に乏しく、支援を受けること自体が難しいことも調査協力者から示された。そうしたサバイバーが、他者の力を借りる機会となるためにも、そしてもちろん、虐待予防のためにも、誰もが気軽に安心して得られる支援を自治体が保証すべきであると言える。

次に、心理カウンセリングについても語られた。Bに至っては、変化の最大の要因となったのは、民間機関で受けたグループカウンセリングだったと述べている。子育ては、日常的に動き続けるものであり、振り返ることがなければ流れていくものとも言える。一定の期間、定期的かつ継続的にカウンセリングを受けることで、その子育てを振り返る機会になることが示された。日常的に過ごしていると忘れてしまうが、ノートを見直すことで思い出して考えることができたというBは語っている。カウンセリングで得た情報や気づきを、その後反復して思考し、深めることにより、子育て場面においても気づきや思考が促されると言える。また、セラピストが知識に裏付けられた専門性を持っていると感じられることが、話すことへの安心感につながっていることも述べられた。つまり、セラピストの対応に信頼性を持つことで、初めて安心して話す場となり得るのである。育児への困難感を安心して語ることは、「親から期待される子」となるよう努めてきたサバイバーにとって非常に難しい。サバイバーらは、安心して「素で話せる」「本音を話せる」場を求めている。そうした場になり得るためにも、セラピストはこれまでに述べられたサバイバー特有の困難感を理解し、適切な援助を提示できる専門性を高めることが必要であると言える。

援助者全体に対しては、理解しようとする姿勢が望まれていた。自身の子育て体験などによる価値観を押し付けられることに抵抗を感じており、自身で気づき、考えることを支援されるような援助を求めている。一方で年上の援助者がより良いと述べられており、母親の代理的な存在を求めていることも示唆された。また、信頼関係を築くことが難しいと感じており、特定の援助者に対応されることが望まれると述べられた。

専門家との関わりや望まれる支援が語られたが、同時に、虐待サバイバーが、安心して

援助を受けられる場を見出すことが困難であることも明らかとなった。必要な支援の専門領域は、人や状況によって異なる。どの領域の支援を受けても、適切な援助が得られるよう、多分野・他領域の専門家における虐待サバイバーへの理解が必要であると考えられた。

夫・義父母

実親が子育てにおけるリソースとなる可能性の低いサバイバーにとって、夫や義父母の存在は重要である。AやBのように、義父母を実親の代理として感じられるケースは、虐待サバイバーの手記からも散見された。親から否定され続けてきたサバイバーが、義父母に受け入れられ、肯定されることは、それだけで十分回復への力となるだろう。加えて、義父母が同居または近隣に住んでいる場合、適切な育児場面に触れる機会にもなり、子育てのスキルを学ぶことも可能である。ただし、一般的に言われている嫁・姑関係の困難さが生じないとも限らない。親という存在への不信感から、義父母に対しても疑心的になる可能性もある。育児を支えられることで、他者に迷惑を掛けるという否定的自己認知を高めることも語られている。そうした問題が生じた際には、夫や友人、専門家の支えが重要となる。しかしながら、子育て場面において親子が孤立しないという意味で、義父母の支えは大きい。サバイバーが困難感から子どもの世話ができない状況にある時には、義父母の介入によって子どももサバイバーも守られ、加虐待の防止にも繋がるだろう。さらに、サバイバーは、実親を大事にできないことで罪悪感を持っており、義父母との関わりを持つことで、その罪悪感を軽減できることもうかがえた。

夫に対しては、育児への協力より、自身を大事にしてほしいという思いが強かった。サバイバーは親からケアされることなく育ち、子育て場面では子どもをケアしなければならないという葛藤を抱えている。だからこそ、子どもに適切に関わるために自身が大事にされる機会が必要であり、それを求めることのできる存在が夫なのであろう。Aからは、一時期、夫に甘え許されることで親代わりと感じられ、回復に向かったことが語られた。加えて、その時期を経たことで、今でも子育てができていと述べていた。被虐待体験に関しては、夫に話しても共感されないと述べられることが多かったが、そのことは問題ではなく、重要なのは現在の困難感を理解され、認められることであった。育児への困難感を受け止められ、時には子どもを連れ出したり、自身が楽しむ時間を作ったりすることで、母親役割から離れられるよう支えることが夫の役割として重要であることが示された。

友人・地域

近所の母親仲間がいることで、サバイバーは自身の困難感を支えられるだけでなく、育児スキルを得ていくことが可能となる。これまで述べてきたように、サバイバーは「理想の母親像」に縛られ、選択肢が狭められている。複数の母親仲間から様々な意見を聞くことで、その選択肢を広げられ、その中から自身に実施可能な選択肢を選べばいいと思えることが大きいと言える。失敗すれば暴力を受けるという結果しかなかった被虐待環境は、サバイバーに一度失敗すれば終わりだという感覚を与える。しかし、多くの親はうまくいかないことを乗り越えながら育児をしており、母親たちの話を聞くことは、そうした現実を知ることにもなり、更には失敗しても修正していけば良いことを具体的に気付く場にもなる。母親仲間の話を聞き、「それもアリ」と思えた、「その家はそれでもうまくいっている」ことに驚いたなどといった感想を持っており、そうした気付きから安心感を得ると共

に、対処方法を増やしていく姿が見受けられた。

ただ、地域のコミュニティが崩壊しつつある現代において、母親仲間を得ることはそう簡単ではないことも示されている。サバイバーはそれに加え、人間関係の築きにくさも感じている。子どもを連れて公園などに行った時には、他の母親に嫌われないよう配慮することに疲れたり、期待通りに動かない子どもに厳しく叱ったり、トラブルを恐れて他者を避けたりと、多くの困難感を経験していた。Aは、メールや掲示板でのやり取りを利用することで、そうした困難を解消していた。近所の知り合いがいなかったため、インターネットで近隣に住む母親仲間を募集し、まずは文字によって安全感を確認して関係を築くことで、大きな傷付きを避けることができ、実際に電話をしたり、会ったりする友人に発展させていた。友人には、子どもの話ばかりでなく、愚痴や趣味の話ができることで支えられていると感じていた。ここでもまた、母親役割から距離を置くことの重要性が示された。

地域コミュニティの有効性も示された。Bは、「門番」と称して建売住宅の入口で話す時間が毎日あり、そこで学校に向かう子どもたちに声を掛けられることで支えられていた。加えて、怒鳴り声が聞こえたら訪問するよう頼んだり、涙目になっていれば誰かに声を掛けられたりと、日常的に関わっているからこそその支えを得ていた。つまり、近所に住む住民は、日常的に様子を知ることが可能であり、信頼関係が築ければ、生活に密着した支えとなり得る。しかし一方で、そうした安心できる関係を築けなければ、その近所という特性は、虐待だと思われてしまうのではないかという不安や不信感を募らせる要因にもなり得る。Aは、知らない女性から悪気なく「虐待しちゃう駄目よ」と言われた経験を述べ、「周りが敵に見えてしまう」と話していた。Bも、電車の中でぐずる子どもの母親に向けられた周りの視線に、今の社会は「母親対大勢」という関係になりやすく、母親たちを苦しめているのではないかと話していた。確かに、虐待を発見する近隣の目は必要である。しかし、それ以上に必要なのは、支え合って子どもを育てていける、虐待予防に繋がる地域コミュニティの存在ではないだろうか。虐待への理解を広めることが、母親たちを追い詰めるのではなく、支援を差し伸べられることに繋がるのが望まれる。

虐待サバイバーは、友人に被虐待体験をカミングアウトすると「引かれる」と感じていた。また、恥ずかしいことだと感じて話せない、どうせ共感されないという思いなども述べられた。更には話したことで動揺させてしまい、罪悪感を覚えたことも語られた。しかしBは、グループカウンセリングを受けたことで、近所の母親仲間に被虐待体験をカミングアウトし、そのことから思ったことを話せるようになったと述べている。また、語ることで整理されたり、過去のことで感じられるようになったり、周りの意見で認知を変えられたりといった効果も示された。Aも、話したことで、自身だけでなく、内容は異なってもそれぞれに大変さを抱えていることに気付けたと述べていた。そういったことから、虐待サバイバーにとって語ることでできる場を持つことは重要ではあるが、安全な場であれば二次被害となる可能性も高い。虐待サバイバーが安心して語れる場を得られるよう支えることも、支援の1つと言えるであろう。

自助グループ・母親サークル

今回の調査では、自助グループに参加した経験のある協力者はいなかった。しかし、Cは自身で母親サークルを主催し、その効果を実感していた。自身の子どもが発達障害で

あったため、支援施設を利用し、そこで学んだことを利用してサークルを始めた。そこで問題となったのは、場所、経費、人材だと言う。材料費が掛かることで参加費を値上げしたところ、何人かは辞めたと話していた。場所に関しても、最終的には公共施設を借りることができたが、団体の詳細が明確でないとの理由で拒まれている。Cは、母親サークルによって母親仲間と関係を持つことができ、子育ての悩みを話したり、子ども同士で遊ばせている間に子どもから離れられたりしたことで、困難感を軽減させていた。被虐待体験については話していないが、加虐待については共感されたと述べており、自助グループのような役割も果たしていたのだろう。また、多くの参加者が集まったと述べており、こうした活動が求められていることが示されたと言える。母親サークルや自助グループといった活動を支えるためにも、場所や経費の公的な援助が充実される必要があるだろう。

書籍・インターネット

これまでの支援が内接的支援であるのに対し、書籍やインターネットは外接的支援と言える。多くの虐待サバイバーが、そうしたツールから情報を得ることで、自身についての理解を深めたり、気づきや自己内省を促したりしていると言える。Aは、自身に起きていることが、客観的な事実として文字となっていると安心すると述べていた。虐待に関する書籍は数多く出版されており、インターネットにも幅広い情報が掲載されている。それらを得ることはそれほど難しくなく、多くのものから選択できることも利点であろう。自身の子育てを振り返る機会となり、子育てのスキルを学ぶ手段となり得る。しかし、様々な情報が得られるため、それらを判断するメディアリテラシーも重要になると考えられる。

また、インターネットでは、情報だけでなく、やり取りをすることも可能である。匿名性で守られた中、被虐待による影響や育児場面における悩みを発することも、そのことへの返答を得ることも、やり取りを見ることが出来る。Aは、掲示板でのやり取りを見ることで、子育てについての多様な意見を知ることができたと話していた。また、プロフィールや日記の掲載、コミュニティの形成などにより、ネットワークを構築するサービスも発展している。これらはインターネット上の自助グループのような役割も果たしていると言え、虐待サバイバーの支援としても有効であろうと考えられる。

．総合考察

まず、調査対象者から得られた評価から、調査における語りが、想起内容がより具体的になる、記憶が整理される、気づきが得られる、肯定的に捉え直す、消化されて距離が置ける、安心して話せることが明らかとなり、調査が協力者にとっても意義のあるものとなったことを示しておきたい。

本研究では、虐待を受けて成人したサバイバーが、子育て場面においてどのような困難感を抱えているのかを明らかにした。虐待サバイバーは、子育て場面において自身の被虐待体験を多分に想起しており、そのことによって様々な感情が生じ、子育てにおける困難感を引き起こしていることが明らかとなった。調査からは、サバイバーが自身の体験を子どもに影響させたくないと感じ、理想の育児をしなければならないと懸命に努力している姿が伺えた。他にも、被虐待体験からくる否定的自己認知や加害者に与えられた価値観などから、生きづらさが生じていることも明らかとなった。そうしたことから、本研究

では、虐待サバイバーにおける特有の困難感が存在していることが明らかになった。

こうしたサバイバー特有の困難感への有効な援助のあり方を検討した。そこでは、現存する援助において、上記のような虐待サバイバー特有の困難感を理解することが、最も重要であることが示された。多くの虐待サバイバーは、他者に理解されないと感じており、肯定される体験を重ねることで、自己を受容し、回復する力が得られることが明らかとなった。そして、回復することで育児への困難感が軽減し、虐待予防にも繋がると考えられた。一般的な育児支援では不十分であることも示され、虐待サバイバー特有の困難感に対応できる援助が求められていた。また、虐待サバイバーは適切な育児を体験しておらず、育児スキルを学ぶための援助が重要であることも明らかとなった。

また、虐待サバイバーの持つ多くの援助リソースが示された。専門家のみで援助するには限界があり、家族、近隣の友人、情報などといったリソースが重要であることが明らかとなった。また、1つのリソースとして、インターネットや書籍における虐待サバイバーの自助的活動が大きな役割を果たしつつあることも、予備調査や本調査によって示された。これらのリソースが得られるようサバイバーを援助することも、専門家の役割とも言える。

加えて、虐待サバイバーの虐待認知から受容までの過程も明らかとなった。サバイバーは、自身が虐待を受けてきたことを事実として受け入れ、自身や過去を捉え直す作業を経て、虐待サバイバーである自己を受容することが必要となる。サバイバーがどのようにその経過を経ているのかが、本調査によって示された。その方法は、それぞれのサバイバーで異なっており、環境や自身の特性に合わせたサバイヴの仕方を見付け出していることがうかがえた。同時に、虐待サバイバーへの育児支援ばかりでなく、受容過程への理解と援助が、共に充実される必要があることが明らかとなった。

これらのことから、本研究において、虐待サバイバーの子育て場面における困難感と受容過程を、具体的な語りによって示されたことは、虐待サバイバーの理解において意義のあることと考えられる。インタビュー調査を行ったことで、虐待サバイバーの詳細なエピソードを得られたことは、本研究の重要な役割となり得た。被虐待経験者が困難感を抱えていることは、これまでも述べられてきているが、その詳細な内実が明らかとなったことで、より適切な援助に発展させることが可能になると思われる。また、本調査が調査協力者である虐待サバイバーにとっても、意義あるものとなったことが示された。以上のことから、虐待サバイバーに特有の困難感の存在とその詳細な内実を明らかにし、支援のあり方を提示したという点において、意味ある研究であったと言える。

．おわりに

2000年に虐待防止法が制定され、12年が経過している。当時、メディアでは「虐待の世代間連鎖」がセンセーショナルに報道され、被虐待経験を持つ虐待加害者に焦点が当たっていた。虐待をする保護者の中に、被虐待経験を持つ確率が高いという調査結果のみで、まるで被虐待経験があれば虐待をするかのように報道はなされた。虐待を受けた保護者たちが、「自分は虐待するようになる」と不安を高めていると感じ、連鎖の内容を明らかにすることで、その不安を軽減できるのではと考えて始めた研究であった。3名の貴重な語

りにより、一言で「虐待の連鎖」と言われているが、虐待被害者としての影響が大きく関与しており、受けた虐待と現在の育児における困難では、内実が異なることが明らかとなったことは、意義があると言える。調査から5年を経た今では、「虐待の連鎖」という言葉を聞く機会は減り、再統合支援の1つとして公的機関での親支援は始まっているが、被虐待経験を持ち、子育てに困難感を抱えている保護者への支援はほとんど進んでいない。

今回の研究では、独自性を重視したために、結果を一般化することは困難である。本研究で明らかになったことは、3名の調査協力者から示された1つの可能性として示唆されるものである。また、年齢や地域も様々であり、影響があると思われる時代背景や地域性なども異なっている。予備調査によって、7名の虐待サバイバーを対象とした調査結果も示されてはいるが、一般化には至らないだろうと思われる。今後もこうした研究を積み重ねられ、育児困難感を抱える虐待サバイバーへの効果的な援助方法の確立が、今後の課題として急務である。

．引用文献

- ・ Cheryl Bodiford McNeil, Toni L. Hembree-Kigin (2010) Parent-Child Interaction Therapy Springer-Verlag
- ・ Francisco G. Cruz, Laura Essen (1994) Adult Survivors of Childhood Emotional, Physical, and Sexual Abuse: Dynamics and Treatment
- ・ F・G・クルーズ 倭文真智子訳 (2001) 虐待サバイバーの心理療法—成育史に沿った包括的アプローチ 金剛出版
- ・ Judith Lewis Herman (1992) Trauma and Recovery
- ・ ジュディス・L・ハーマン 中井久夫訳 (1996) 心的外傷と回復 みすず書房
- ・ Katie Evans, J. Michael Sullivan (1994) Treating Addicted Survivors of Trauma
- ・ ケイティ・エバンズ, 白根伊登恵訳 (2007) 虐待サバイバーとアディクション 金剛出版
- ・ 春原由紀・土屋葉 (2004) 保育者は幼児虐待にどうかかわるか 大月書店
- ・ 斎藤学 (1999) 封印された叫び 講談社
- ・ 野口啓示・のぐちふみこ (2009) むずかしい子を育てるペアレント・トレーニング 明石書店
- ・ 岡田ユキ (2004) 虐待死をまねがれて サークル・ダルメシアン